

## 試論—ワーズワスと樹林 —『鹿跳びの泉』をめぐって—

中村 博文<sup>1</sup>

キーワード：文学 環境

### (序)

文学作品の中には、野生植物や動物への言及がしばしば見られる。古来、森林に取り囲まれて暮らしていた結果、自然に対する感受性がひととき強いイギリス人による文学作品、特にイギリス・ロマン派を代表する William Wordsworth の作品には、彼の故郷にほど近い湖水地方の自然美を謳うものが多い。彼は花鳥風月を愛でながらも、当時既に始まっていた環境破壊を批判し続ける。

*Hart-leap Well* (1800年出版) は、*Lyrical Ballads* 1800年版所収の作品で、二つの部分から成り立っている<sup>1)</sup>。とりわけ第二部冒頭で語り手は、Hawes から Richmond へ馬で向かう途中、たまたま木の茂る谷間に朽ち果てたアスペン(aspen=ポプラの一種)を見つける。谷間の小広い場所の三隅に木が立つ不自然さから、そこは何かいわくありげな場所だと推察した語り手の前に、折りしも一人の羊飼いの老人が登場し、その老人はこの土地に纏わる悲しいエピソードを語り始める。本稿ではこの部分を詳しく読みながら、作者 Wordsworth の森林に対する考え方を探り、他の作家の類似した作品も取り上げつつ、自然環境保護の立場から検討していく。

### (I)

*Hart-leap Well* のかかる部分を、以下に詳しく読んでみる。

As I from Hawes to Richmond did repair,  
It chanc'd that I saw standing in a dell  
Three aspens at three corners of a square,  
And one, not four yards distant, near a well.

What this imported I could ill divine,  
And, pulling now the rein my horse to stop,  
I saw three pillars standing in a line,  
The last stone pillar on a dark hill-top.

The trees were grey, with neither arms nor head;  
Half-wasted the square mound of tawny green;  
So that you just might say, as then I said,  
"Here in old time the hand of man has been." (ll. 101~12)<sup>2)</sup>

---

1 Hirofumi NAKAMURA 千里金蘭大学短大部生活文化学科 (受理日：2007年11月8日)

馬でこの場所を通りかかった語り手は、三本のアスペンが谷間の広場に立っているのを発見する。そのうちの一本は、泉から4ヤードとは離れていなかった。語り手は馬を止め更に目を凝らすと、三本の石柱が一行に立っていることも判った。アスペンは既に朽ち果て、枝葉はない。広場の三隅に立つアスペンや一行に並ぶ三本の石柱は人為的であると感じた彼は更に、

More doleful place did never eye survey;  
It seem'd as if the spring-time came not here,  
And Nature here were willing to decay. (ll.114~6)

と述べ、この場所が異様なまでに侘しく荒廃している点を指摘する。

では、"the hand of man"の及んでいない、自然のままの森林とはいかなるものか見てみよう。*Hart-leap Well*と共に1800年版 *Lyrical Ballads* に収められている *Nutting* (1799年) に、興味深い部分がある。この作品の語り手である少年は、申し分のない天候のとある秋の日、ハンバミの実を求め山に入り、道のない岩場を越え悪戦苦闘しながら進んでいく。

Among the woods,  
And o'er the pathless rocks, I forc'd my way  
Until, at length, I came to one dear nook  
Unvisited, where not a broken bough  
Droop'd with its wither'd leaves, ungracious sign  
Of devastation, . . . (ll. 12~7)<sup>3)</sup>

やがて彼がたどり着いた場所には先着の人物は見当たらず、実を収穫するために木が荒らされた形跡は見当たらない。それは彼自身が"A virgin scene!"(l.19)と述べている点からも納得できる。ハンバミを収穫するのは彼一人なので("fearless of a rival" l.22)、慌てて作業を開始する必要はない。花々が咲く林床に腰を下ろした彼は、しばし花と戯れる(ll.23~4)。

更に、森内の美しい光景を彼は以下のように描写する。

—Perhaps it was a bower beneath whose leaves  
The violets of five seasons reappear  
And fade, unseen by any human eye,  
Where fairy water-breaks do murmur on  
For ever, and I saw the sparkling foam,  
And with my cheek on one of those green stones  
That, fleec'd with moss, beneath the shady trees  
Lay round me scatter'd like a flock of sheep,  
I heard the murmur and the murmuring sound,  
In that sweet mood when pleasure loves to pay  
Tribute to ease, . . . (ll. 28~38)

木々に囲まれた林床には、人目につかずスマレが何年間も花を咲かせ続け、傍らの小川の瀬音も絶えることはない。日陰と湿気のため表面にコケが生えた小石に、語り手は自分の頬を接触させ、せせらぎに耳を傾ける。その小石を"scatter'd like a flock of sheep"と述べる彼は、自身を恰も羊飼いの如くみなしているようだ。羊の群れを導く羊飼いは、Christのイメージを読者に与えるが、それ以上に牧歌的雰囲気をかもし出し、困ってこの場面は平安と安逸に満ちた理想郷となる。無論、三本の朽ち果てたアスペンが残る、*Hart-leap Well*の樹林下の広場とは著しくコ

ントラストを成している。

しばらく休息をとった後、語り手の少年はいよいよ、たわわに実るハシバミの収穫を始める。

Then up I rose,  
And dragg'd to earth both branch and bough, with crash  
And merciless ravage, . . . (ll. 41~3)

と述べる語り手は、ハシバミの枝を引き摺り下ろしたりへし折ったりと、相当乱暴な所業に及んだ。さすがに良心の呵責を感じたらしく、最後に彼は、"I felt a sense of pain when I beheld/The silent trees and the intruding sky." (ll.50~1)と述べる<sup>4)</sup>。さながら自然庭園を形成しているかのようなハシバミの樹下は、がむしゃらに実を得ようとする少年により踏みにじられ、原形を留めないくらいに痛めつけられてしまった("Deform'd and sullied," l.45)。Nuttingでは、人間の暴力的な力の為すがままに破壊される、自然の女性的柔弱さないしは無力さが強調されているようだ<sup>5)</sup>。これは、環境破壊から自然を保護することが声高に叫ばれている現代にも通用する、新鮮味を持つ。

Nuttingで、語り手の少年が訪れる森の奥まった場所は、文字通りの処女地で、その樹林は人為的に植栽されたものではない。Hart-leap Wellの語り手にとっても、自然林は人間が手出しするべきものではなかったに違いない。それ故、三本のアスペンや石柱の不自然さに彼は気付き、その場所に関心を寄せる。

再びHart-leap Wellに戻ろう。折りよく彼の前に現れた羊飼いの老人に、語り手はこの場所の由来を尋ねる。Sir Walterに13時間大追跡された手負いの鹿は、最後に高い崖から三步で跳び下り、泉の辺で息絶えた<sup>6)</sup>。自身の手柄を記念しSir Walterは、この土地にあずまや、邸宅、泉水などを建設し(ll.127~9)、夏には自分の愛人を招待して、歌や踊り三昧に時を過ごした(ll.89~92)ことなど、既にPart Iで述べられている事柄が、この場で繰り返される。しかし、語り手も老羊飼いのSir Walterの大追跡という「偉業」には関心がない。Sir Walterにより、この土地がまるで呪われたかのように荒廃したこと、そして哀れな鹿がなぜ大疾走の挙句、この場所へ戻ってきたのか、を中心に二人の会話が続く。

There's neither dog nor heifer, horse nor sheep,  
Will wet his lips within that cup of stone;  
And, oftentimes, when all are fast asleep,  
This water doth send forth a dolorous groan. (ll. 133~6)

かつてSir Walterの饗宴で賑わった泉水の辺では、今や水を飲みに来る動物は一匹もいなくなった。更に、その泉はしばしば夜中に、物悲しいうなり声を発する。

その鹿が幼い頃、同じ泉の様子は全く異なっていた。

Here on the grass perhaps asleep he sank,  
Lull'd by this fountain in the summer-tide;  
This water was perhaps the first he drank  
When he had wander'd from his mother's side. (ll. 149~152)

誕生後間もない幼い鹿は、泉が湧出する音の子守唄のように聴き、母鹿の乳以外最初に口にしたもの、この泉の水だったかもしれない。前述したNuttingの語り手は、人気のない森の中でしばらく佇み、せせらぎに耳を傾け、甘美な快樂にふけっていた(ll.36~8)。この二つの場面は、原初の楽園のイメージをかもし出す。更にHart-leap Wellで羊飼いは、"In April here beneath the scented thorn/He heard the birds their morning carols sing," (ll.153~4)と述べる。小鳥のさえずりを"morning carols"にたとえている点はEdenを想起させ<sup>7)</sup>、それによりその場所

が聖化されているといえる。

ところが今や、そこはすっかり変わり果てた。

But now here's neither grass nor pleasant shade;  
The sun on drearier hollow never shone:  
So will it be, as I have often said,  
Till trees, and stones, and fountain, all are gone." (ll. 157~60)

このスタンザ一行目の"now"は、前のスタンザ冒頭の"In April"と著しいコントラストを成している。春が訪れる四月には、サンザシも満開となり芳香を放ち、他方小鳥は賑やかにさえず。春夏秋冬という四季の推移と共に、自然界の営みも変化し続け、これは太古の昔より毎年繰り返されてきた。だが、今やこの土地には草も快適な木陰もなくなり、これ以上侘しい谷間は他に見られないほどまで、すっかり荒れ果ててしまった。もはやここでは、自然の通常の営みは行われておらず、それどころか泉の水が夜中に物悲しいうめき声を発するとか(ll.135~6)、ここで殺人があったなどという不気味な噂さえ聞こえてくるようになった(ll.137~8)。語り手が、"It seem'd as if the spring-time came not here,/And Nature here were willing to decay."(ll.115~6)と述べるように、ここでは本来の自然は姿を消し去った。そのような abnormal な場所では、しばしば亡霊が出没し、殺人などの犯罪が横行する。

## (II)

Wordsworth 作 *A Guide through the District of the Lakes in the North of England with a Description of the Scenery, &c. for the Use of Tourists and Residents* (1810年初版。以下 *Guide to the Lakes* と略す)は、彼の生前ベストセラーとなった散文による作品で、詩作だけでは不如意だった当時の、この詩人の生計面に大いに寄与したといわれている<sup>8)</sup>。この作品の内容は、イギリス湖水地方を案内する言わばトラベルガイドブックであるが、作者自身湖水地方の住人であったため、この地方に対する思い入れは極めて大きい。とりわけ、カラマツ(larch)が自然林の中に人工的に植林されているその不自然さが、執拗に批判されていて、それは樹林に対する作者の考え方を探る手がかりになる。以下に詳しく読んでみよう。

作品は最初、Windermere 湖の紹介から始まる。直ちに語り手は、

The view from the Pleasure-house of the Station near the Ferry has suffered much from Larch plantations; this mischief, however, is gradually disappearing, and the Larches, under the management of the proprietor, Mr. Curwen, are giving way to the native wood. (p.224)<sup>9)</sup>

と述べ、湖岸の渡船場から見渡したとき、カラマツの植林が大変目障りであることを読者に訴えかける。カラマツは17世紀イギリスに導入され、種子が発芽しやすい、苗木の成長が早い、土質を選ばないなどの利点を有しているため、現在でも世界的に重要な造林用資源である<sup>10)</sup>。

湖水地方の森林は元来、

The WOODS consist chiefly of oak, ash, and birch, and here and there Wych-elm, with underwood of hazel, the white and black thorn, and hollies; in moist places alders and willows abound; and yews among the rocks. (p.251)

と彼が述べるように、カシ、トネリコ、カバノキ、セイヨウハルニレ、ハシバミ、サンザシ、ハンノキ、ヤナギなど、主として落葉樹である。その中に、セイヨウヒイラギ(モチノキ科。わが国のヒイラギはモクセイ科の別種)やイチ

イなどの常緑樹が混在して生育する。セイヨウヒイラギは比較的背丈が低い、イチイは大樹に成長する。しかし成長が大変遅いため、イギリスでは庭木のみならず生垣にも好んで用いられている<sup>11)</sup>。ともあれ、イギリス山間部の植生は、上述したような状態だった。

ところが、続いて彼が、"Other trees have been introduced within these last fifty years, such as beeches, larches, limes, &c. and plantations of firs,"(p.251)と述べるように、最近五十年のうちに、ブナ、カラマツ、リンデン、モミなどが植林されてしまった。それに対し作者は、"seldom with advantage, and often with great injury to the appearance of the country;" (p.251)と、不満な気持ちを吐露する。

尤も、背丈の低い苗木のカラマツだけを眺めると、それは幾分か美的価値を持つことは彼も認める("It must be acknowledged that the larch, till it has outgrown the size of a shrub, shows, when looked at singly, some elegance in form and appearance," p.282)。しかし、成長し大木になると、カラマツの魅力は他のいかなる樹木よりも劣る。

Its branches (*for boughs it has none*) have no variety in the youth of the tree, and little dignity, even when it attains its full growth: *leaves it cannot be said to have, consequently neither affords shade nor shelter.* (p.282)

枝に変化も貫禄もなく、針葉樹のため葉も葉といえるほどのものではなく、それは日陰にならず、風雨をさえぎる役にも立たない。

春の芽出し頃のカラマツは、

In spring the larch becomes green long before the native trees; and its green is so peculiar and vivid, that, finding nothing to harmonise with it, wherever it comes forth, a disagreeable speck is produced. (p.282)

と、他の樹木より早く芽を出し、また鮮明な緑色が余りに目立ちすぎるため、彼の目には不快な染みとしか映らない。更に、

In summer, when all other trees are in their pride, it is of a dingy, lifeless hue; in autumn of a spiritless unvaried yellow, and in winter it is still more lamentably distinguished from every other deciduous tree of the forest, for they seem only to sleep, but the larch appears absolutely dead. (p.282)

と、カラマツのあら捜しは続けられる。生命感漲る夏の森林の中で、カラマツは、"a dingy, lifeless hue"を呈している。秋に木々が紅葉する頃、カラマツは単調な黄色に葉色を変え生気がない。更に、冬には他の木々が眠っているだけなのに、カラマツは死に絶えたように見える。カラマツを他種の樹木と混成で植林しても、カラマツの水平に伸びる枝が他の樹木の成長を妨げ、やがて成長が早いカラマツの背丈に合わせ他の樹木を無理やり徒長させようとする。

次に作者は、カラマツが谷から谷まで一面に自生し大森林を形成する国々について言及し、そのような場所では、"a sublime image may be produced by such a forest"(p.283)と述べ、カラマツの利点も認めるかのようだ。しかし続いて、"this feeling is confined to the native immeasurable forest; no artificial plantation can give it."(p.283)と述べ、あくまでカラマツの広大な自然林にのみそれが当てはまると断る。

土地所有者が自分の地所や住居を装飾する際、とりわけ土地に植栽する場合、作者は、"with respect to grounds-work, where you can, in the spirit of Nature, with an invisible hand of art."(p.273)と助言する。これは即ち、

「自然」を思いやる気持ちで、しかも芸術家のような繊細な心遣いで作業に当たるように、という意味であろう。続いて彼は、"Houses or mansions suited to a mountainous region, should be 'not obvious, not obtrusive, but retired;"(p.274)と補足する。要するに、館や庭などの人工物は、山間部では周囲の自然と調和しなければならず、それらが目立ちすぎることなく、控えめでなければならない。これは、作者の森林に対する考え方についても当てはまる。カラマツのように成長が早く、また春の芽出しも早く、派手に紅葉し落葉する木は、混成林の中では目立ちすぎ、それが作者の気に食わないのである。

外国から導入された植物の植栽に関しても作者は、土着の植物と違和感なく自然に溶け込める状態であるべき点を主張する。人工植林や輸入植物の植栽が流行していた当時、カバノキ、ヨーロッパアカマツ(Scotch fir)などの土着の植物の長所を挙げつらう彼は、

If these general rules be just, what shall we say to whole acres of artificial shrubbery and exotic trees among rocks and dashing torrents, with their own wild wood in sight — where we have the whole contents of the nurseryman's catalogue jumbled together — colour at war with colour, and form with form? — among the most peaceful subjects of Nature's kingdom, everywhere discord, distraction, and bewilderment! (p.281)

と憤る。だが、それとてカラマツの植林ほど目障りではないと続ける。この場に及び、作者は声をひときわ高めカラマツを攻撃しているようだ。

作者にとり、自然林が作られるプロセスは、以下の如きものでなければならない。

Seeds are scattered indiscriminately by winds, brought by waters, and dropped by birds. They perish, or produce, according as the soil and situation upon which they fall are suited to them: and under the same dependence, the seedling or the sucker, if not cropped by animals, (which Nature is often careful to prevent by fencing it about with brambles or other prickly shrubs) thrives, and the tree grows, sometimes single, taking its own shape without constraint, but for the most part compelled to conform itself to some law imposed upon it by its neighbours. From low and sheltered places, vegetation travels upwards to the more exposed; and the young plants are protected, and to a certain degree fashioned, by those that have preceded them. (p.281)

最初に植物の種子が風で運ばれたり、水に流されてきたり、また鳥によってばら撒かれる。土壌の性質により発芽したり、しななかったりするが、幸運にも動物の餌にならなかった種子は育つ。それにも自然の巧みな仕掛けがあり、キイチゴなどとげの多い植物に種子が守られ、動物が近寄れないためである。成長する木は、他の植物の邪魔を受けない場合、それ独自の樹形を形成していくが、大抵周囲に茂る樹木によりその樹形に制限を受ける。初め低い日陰の場所から、植物は日当たりの良い空間へ上向きに伸びる一方、若木は樹齢を重ねた木々により守られ、ある程度までその樹形も先輩の木々により形作られる。要するに、本来森の種々の植物は、お互い相互依存の関係を保ち続けているのだ。

次第に樹林帯は拡大するが、岩場、湿地ではそれが途切れる。だが、樹林は尚も高度を上げて広がり続け、そのような場所では強風によって樹形は変化する。だが、やがて土壌の性質や、強い風雨にさらされ、樹林はそれ以上高度を上げて成長することをやめる。そのような標高の荒れた土地では、最も丈夫な種類のみ生き残るが、やがて枯死していき、樹林限界線が形成される(pp.281~2)。それを眺めるとき作者は、"some feeling . . . of the powers

of Nature"(p.282)を心に抱くと告白する。樹林帯が標高の高い地域へと生長発展するにつれ、それを益々促進する力"the liberty that encourages"(p.282)と、逆にそれを妨げる力"the law that limits"(p.282)が作用し、その結果樹林帯はほどほどの状態に保たれる。

それとは逆に、人工的植林は同時一斉に苗木が植栽されるため、昔から生育している一人前の樹木と、芽生えたばかりの幼木との相互依存に似た有機的つながりが乏しい。いかに経験を積み豊かな美的感覚を持った植林家であろうと、自然の美に挑戦することは不可能のようだ。

### (Ⅲ)

*Hart-leap Well* で、老羊飼いが話し終えた後語り手は、

This beast not unobserv'd by Nature fell,  
His death was mourn'd by sympathy divine.

The Being, that is in the clouds and air,  
That is in the green leaves among the groves,  
Maintains a deep and reverential care  
For them the quiet creatures whom he loves. (ll. 163~8)

と述べる。この鹿が息絶えたとき、"Nature"はじっと見守り、また"sympathy divine"によりその死は弔われた。この"sympathy divine"は"Nature"が抱くものであるとみなすことが出来、更に"Nature"は、"The Being, that is in the clouds and air,/That is in the green leaves among the groves,"だと語り手は述べる。ここでは、"Nature"の personification が行われ、事実168行目では"he"という男性人称代名詞が用いられている。ところが、173行目では、"She leaves these objects to a slow decay"というように女性人称代名詞が使われ一見矛盾しているようだ。女性人称代名詞を用いた場合、Nature の非人格的な面が示され、男性人称代名詞では、優しさと愛というイメージをかし出すというように解釈されている<sup>12)</sup>。

ともあれ、哀れな鹿の死は、"a deep and reverential care"(l.167)を抱く"Nature"により弔われた。そして"Nature"は、廃墟と化した Sir Walter の建造物を益々朽ち果てさせ、元の自然の姿はやがて取り戻されるだろう。("Nature, in due course of time, once more/ Shall here put on her beauty and her bloom."(ll.171~2)。

たまたま馬でこの土地を通りかかった語り手は、森の一角に人為的と思える三本のアスペンの枯れ木や石柱を発見し、訝しく思うのが発端となり、*Hart-leap Well* 第二部の物語が始まった。栄華を誇った Sir Walter の、今となっては不明瞭な残骸と化した歓楽の館は、"She[Nature] leaves these objects to a slow decay/That what we are, and have been, may be known;"(ll.173~4)と語り手が述べるように、浅はかな人間に身の程を教えるための、一種の見せしめである。しかし、やがてそれは完全に朽ち果ててしまい、元通りの自然が回復するだろう("But, at the coming of the milder day,/These monuments shall all be overgrown." ll.175~6)。

*Guide to the Lakes* でも、自然のこのような自己浄化作用に関する言及が見られる。一方で材木を伐採したり、建造物のため森を切り開き、他方不釣り合いな外来種の樹木を植林することなどにより、森の自然美が損なわれることを嘆く作者は、にもかかわらず"the benignity of Nature"に言及し、自然から次々とその美や装飾を取り去っても、自然の美しさは損なわれないと述べる。そして彼は、"the scars, if any be left, will gradually disappear before a healing spirit; and what remains will still be soothing and pleasing."(p.284)と続けて述べ、自然の受けた傷を癒す"a healing spirit"の存在をほのめかす。これは、上述の *Hart-leap Well* 結末で言及される、荒廃した森の一角を元通りの自然状態に戻す"Nature"と同一の働きを持っている。

*Nutting* の結末で語り手は、"dearest Maiden"(l.52)に向かい、

move along these shades  
In gentleness of heart; with gentle hand  
Touch, —for there is a Spirit in the woods. (ll. 52~4)

と諫める。自身が森の処女地をさんざ荒らした挙句、このような教訓を垂れるのは甚だ理不尽に思えるが、ともあれ、ここでは単に森の中の"a Spirit"と表現されているに過ぎない。しかし、*Hart-leap Well* では前述のように、男性形、女性形二つの人称代名詞を用い、Nature は人格化されている。Wordsworth の抱くいわゆる「自然宗教」は、風光明媚な湖水地方で彼が生まれ育ったことにより培われたものだと言われているが<sup>13)</sup>、やがて愛と無慈悲の両面を持つ自然の姿が、彼の心の中でより明確化されていき<sup>14)</sup>、*Hart-leap Well* では、それが端的に表現されていると言える。

*Guide to the Lakes* の中でも作者は、既に環境破壊が始まっている湖水地方に、再び元通りの自然を取り戻すため熱弁を振るう。彼は、湖水地方の住民たちの財政面にも触れ、かつてこの住民は農作物の収穫や家畜からの収益のみならず、農閑期に家族が手工業に臨時雇いされて得た副収入という、二つの収入で支えられていたと述べる(p.285)。しかし、産業革命がもたらした機械化により、羊毛を紡ぐ仕事は雇用がなくなってしまった。おまけに、家内工場での仕事に精魂を使い果たし、家業である農業をおろそかにする者も現れる始末だ。工場の建設に伴う農作物の高騰や、その結果農業が勢いづくことに恩恵をこうむっている者もいるが、それとて彼らには決して十分でない。

結果的に農地は抵当に入れられ、売りに出されて"wealthy purchasers"(p.286)の手に渡る。彼らは、この土地に住みたい場合、古びた廃屋を壊し新築するが、しばしば新築された館はその土地に不釣り合いなものとなることは予想される。それを懸念する作者は、"a better taste"(p.286)をそれらの新たな入居者に持たせるよう切望する。趣味の悪さは、環境破壊を招きかねない。

最後に作者は、"persons of pure taste throughout the whole island"(p.286)に呼びかけ、"they deem the district a sort of national property"という願望を示す。これは、後の National Trust の創始者たちが抱いていた思想の魁を成すもので、事実 Wordsworth が彼らに与えた影響は大変大きい<sup>15)</sup>。

#### (IV)

William Morris は、ラファエル前派に属し、詩や小説などを発表すると同時に、工芸美術家、社会改革家としても活躍したことで知られている。彼はまた、ガーデニングをこよなく愛した人物としても有名で、植物に関する造詣が大変深く、植栽についての彼の持論は興味深いものである。とりわけ彼は、原産植物を重要視したと言われ、それは特定の場所に対する彼自身の愛着感から生じたものかもしれない<sup>16)</sup>。*genius loci* へのこだわりとも言えるこの態度は、Wordsworth の諸作品中にも見受けられる。ここでいう原産植物とは、特定地域に自生する原種植物を意味し、一般に原種植物は交配種ほど派手で華美ではなく、むしろかなり控えめであるが、素朴で可憐な花を見せてくれる。Wordsworth は野生のスミレを、

A Violet by a mossy Stone  
Half-hidden from the Eye!  
—Fair as a star when only one  
Is shining in the sky! (ll. 5~8)<sup>17)</sup>

と謳っている。「半ば人目を避けるかのごとく、苔むした石の傍らで一輪の花を着けるスミレ」は、決して絢爛豪華とは言えないものの、空に瞬く一番星のような純粹無垢な美しさが備わっている。

Morris が特定の場所にこだわっていたもう一つの証拠として、彼が公園の中の Palladio 式の建築物を非常に嫌っ



ていたという点を挙げるべきだろう<sup>18)</sup>。その理由は、Palladio 式邸宅は、公園の中では全く場違いに見えるからだ。彼が重視したのは、その地域との関連性、連続性であり<sup>19)</sup>、これは Wordsworth の *Guide to the Lakes* の中で、作者がその地域の植生を重んじ、外来種のカラマツが森の調和を乱すことを、読者に向かい執拗に訴えかけているのと類似している。Morris は、石垣の石、建物の建材などに至るまで、その土地で得られる材料を用い、その土地の伝統的な建築様式に従うべきだと主張した。

当時既に園芸植物の品種改良が盛んに行われていたが、これに対しても Morris は否定的で、八重咲き品種や、素朴なバラとは比較にならないほど巨大な花を着ける改良品種のバラには、嫌悪感を示していた。更に、温室で栽培される熱帯、亜熱帯性植物に対しても、それは当てはまる。

イギリスは海運力に秀でた国で、また17世紀、アメリカに新たな植民地が出来たこともあり、異国の植物に対する人々の関心は高まりつつあった<sup>20)</sup>。当時インドをはじめとするアジアや南アメリカ諸国から、植物の苗や種子は、本国にどんどん送られていた。

イギリス本国への輸送の途上、様々な気候の地域を船が通過するため、熱帯性植物は寒冷地通過中に枯死する恐れがあり、この対策も様々に考案されていた。とりわけ、Nathaniel B. Ward は、ガラス製の四角いケースを発明し、これは寒冷地を船が通過する際、熱帯性植物を保温するために大変有益だった。このケースは Wardian case と称し、現在でも熱帯植物の栽培に用いられている<sup>21)</sup>。そのような創意工夫で、世界中から珍種と呼ばれる植物が次々と本国にもたらされ、王侯貴族連中は、その珍奇性を競い合ったのである。彼らには、お抱えの plant hunter と呼ばれる植物採集家がいて、彼らは南米アンデス山中やアマゾン川流域のジャングル、そして熱帯アジアやヒマラヤ山中で、致命的な危険を冒してまで植物採集を続けた。十九世紀後半を迎えた Morris の時代、イギリスの植物市場には、plant hunter 達が持ち帰った異国の植物が溢れんばかりであったことは容易に想像できる。

既に当時、新興富裕層の家庭には温室が普及していたといわれ<sup>22)</sup>、その中で沢山の熱帯植物が生育していたに違いない。無論、熱帯地域のラン科植物もかなりの種類が栽培されていた<sup>23)</sup>。だが、植物に関する Morris の著作の中で、ランに関する言及は余り見出せないように思える。なるほどランは、巨大な美花を着けるが、余りに異国風でイギリスの風土に馴染まず、特にイギリス固有種を重視した Morris の関心を引かなかったのであろう<sup>24)</sup>。

Morris から多大の影響を受けた幾多の人物の中でも、Gertrude Jekyll は現代の British Garden の先駆者的存在である。Wordsworth は *Guide to the Lakes* の中で、特に湖水地方の森林に言及し、外来種のカラマツなどよりイギリスの山野に自生する植物で形成された森林をより高く評価した。それと類似した精神は Morris にも見られ、彼も華美な輸入植物や交配種より、控えめだがより可憐なイギリス産の原種植物を重要視し、それを彼の工芸品に意匠として積極的に取り込んだことはよく知られている。これら二人の先輩たちの系譜上に、Jekyll は位置する。彼女は、自然に対し謙虚な態度を維持し続け、イギリスに自生する植物を中心とする庭園造りを行った。また、山野の自然の中では、人為的な要素は一切加わっていないにもかかわらず、植物相互の色彩バランスや配置などが実にうまく出来上がっている点に、彼女は大いに感銘を受け、自身の庭園デザインにもそれを取り込んだことも無視できない<sup>25)</sup>。これは Wordsworth の *Guide to the Lakes* で、作者が読者に対し再三訴えかけている事柄でもある。

## (結び)

Wordsworth は、イギリス・ロマン派詩人の中で、とりわけイギリス山野の植物をテーマにした作品をたくさん書いている。彼は、自然界の植物や動物に関する知識を豊富に持っていた。特に、湖水地方の自然美を詩作などで謳いあげ、当時既に開発の憂き目に遭遇しつつあったその地方元来の植物相を紹介し、国民に自然保護を訴えかけた。やがてこれは、十九世紀末 National Trust 運動として結実する。William Morris も、当時流行していた外国産の華美な植物を嫌い、イギリスの庭園にはイギリス原産の植物が最も適していることを、様々な著作で力説している。彼の装飾デザインには、イギリスの山野に見られる野草があしらわれていることはよく知られている。

広く山野に自生する植物を庭園で栽培することで、そういった植物に対する人々の親近感を喚起し、その結果原種植物が生い茂る自然の保護が啓発される。今日、先進国のみならず、開発途上国でも山林が伐採され、農地が次々と宅地に変えられ都市化が進んでいる。動植物のかつての自生地、棲息地は加速度的に消失し、他所に適応できない種は絶滅せざるを得なくなる。絶滅危惧種は Red Data Book にリストアップされ、嚴重な保護が呼びかけられ

ているが、それらの種の中には、かつては山野でごく普通に見られたものも少なくない。幸運にも、それらの野生種が依然自生する地域も存在するので、そこへむやみに外来種などを持ち込まず、自生地を保護しつつ増殖に心がけるのが最善策だろう<sup>26)</sup>。

(注)

1. この作品について、以下の二つの拙論で言及している。『ワーズワス「鹿跳びの泉」論考—鹿の逃走について』『研究誌』第32号(金蘭短期大学、2001年) 『レイチェル・カーソン著「沈黙の春」を読む—「沈黙」の意味について—』『研究誌』第34号(金蘭短期大学)
2. *Hart-leap Well* からの引用は、下記のテキストに拠る。James Butler, Karen Green (Eds.), *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797—1800 by William Wordsworth* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1992)
3. *Ibid.*
4. 注1で紹介した拙論『レイチェル・カーソン著「沈黙の春」を読む—「沈黙」の意味について—』の中でも、この点を詳しく論じておいた。
5. この作品を gender 論的な立場から解釈する向きもある。注4の拙論の中でも紹介している。
6. 瀕死の傷を負いながら13時間にもわたり疾走を続けたこの鹿は、大変興味深い。注1の拙論『ワーズワス「鹿跳びの泉」論考—鹿の逃走について』の中では、Byron 作 *Mazeppa* に登場する馬の疾走とこの鹿を比較検討した。
7. Rachel Carson 著 *Silent Spring* には、DDT で汚染される以前の理想郷の如き町が登場し、そこは春になると百千鳥がさえずり、百花繚乱の世界であった。しかし、汚染後は一羽の鳥も舞い降りず、花も咲くことはない。過去の理想郷が今や侘しい荒野のように成り果てた点で、この物語もエデン型の神話とみなせるだろう。
8. 吉田正憲著『ワーズワスの「湖水案内」』(東京: 近代文藝社、1995)、p.9。本稿作成に当たり同書に負うところが極めて大きい。
9. Rev. Alexander B. Grosart (Ed.), *The Prose Works of William Wordsworth 3 Vols.* (London: Edward Moxon, Son, and Co., 1876) Reprinted by AMS Press Inc. (New York, 1967)
10. カラマツは、山火事や大規模な伐採などにより森林が消失した土地に、真っ先に生長する樹木であるといわれている。当時のイギリスは産業革命のさなかで、蒸気機関の燃料となる石炭や木材に対する需要が多かったことが予想される。大量の樹木が切り倒された後の禿山に、カラマツの植林が行われていたのかもしれない。しかし、カラマツ林はやがてトウヒ、モミなどの陰樹(暗い場所を好む樹木)に置き換わり、ほぼ一代限りで消え去ると考えられている。仮に長い年月に渡ってカラマツ林が継続する場合、そこは他の樹木が育たないくらい条件が悪い(多湿、土地が極端にやせている、断崖など)とみなせる。また、かつては炭鉱の坑木にもカラマツは用いられていた。当時のイギリスでは石炭の採掘が盛んに行われていたことも、カラマツの植林と関連しているのかもしれない。本稿作成に当たり、植物に関しては以下の書物を随時参考にした。岩槻邦男 他監修、『植物の世界』週刊朝日百科シリーズNo. 128 コウヤマキ カラマツ (東京: 朝日新聞東京本社、1996)。塚本洋太郎 総監修『園芸植物大事典』2 Vols. (東京: 小学館、1999)。トニー・ロード 他著、小佐田愛子 他訳『Gardening フローラ』2 Vols. (東京: 産調出版、2005)。
11. William Morris もその著書でしばしば、holly や yew の生垣を推奨している。(ジル・ハミルトン、ペニー・ハート、ジョン・シモンズ著、鶴田静 訳『ウィリアム・モリスの庭—デザインされた自然への愛』(東京: 東洋書林、2003)参照のこと。
12. 原 一郎著『ワーズワス研究—詩魂の転変の跡を追って—』(東京: 北星堂書店、1983)、P. 57。これは、Wordsworth の宗教観にも関わっているが、本稿ではその詳細に触れない。
13. *Ibid.* p.35。
14. *Elegiac Stanzas Suggested by a Picture of Peele Castle, in a Storm, Painted by Sir George Beaumont* で Wordsworth は、嵐に翻弄される Peele Castle を描いた Beaumont に賛辞を送る。彼は、自然の無慈悲な面も直視できるまでに精神的成長を遂げたといえる。
15. 吉田正憲、p.142。
16. ジル・ハミルトン、ペニー・ハート、ジョン・シモンズ、pp.11~2。

17. 注2のテキストより引用。
18. ジル・ハミルトン、ペニー・ハート、ジョン・シモンズ、p.20。
19. *Ibid.* p.20。
20. T. ホイットル著、白幡洋三郎、白幡節子 訳 『プラント・ハンター物語—植物を世界に求めて』(東京: 八坂書房、1983)、pp.26~48。
21. *Ibid.* pp.105~11。他に、中山理 著 『イギリス庭園の文化史—夢の楽園と癒しの庭園』(東京: 大修館書店、2003)、p.187にも Ward への言及が見られる。
22. ジル・ハミルトン、ペニー・ハート、ジョン・シモンズ、p.27。
23. イギリスは、洋ラン栽培の本家だといわれている。それは、十九世紀初頭、ブラジルから届いた船荷の詰め物としてたまたまランが用いられていたことによる。当時の植物栽培家William Cattley がそのランを持ち帰り温室で栽培していたところ、数年後にそれは見事な花を咲かせた。これは、ブラジル原産の *Cattleya labiata* で、*Cattleya* という属名は Cattley の名に因む。それ以後、イギリス上流階級の人々の間でラン栽培熱が俄かに高まり、彼らは挙って plant hunter をランの原産国へ送り、珍種獲得にしのぎを削りあった。大部分の熱帯ランは高木の幹や岩壁に着生して生育するので(epiphyte)、plant hunter の中には採集中墜死する者や、熱帯地方の過酷な気候の下で病死する者も少なくなかった。彼らは珍種を入手したときの賞金目当てに、危険を冒してまでラン採集を続けていたのだ。園芸王国を標榜するイギリスには、Royal Horticultural Society(RHS= 王立園芸協会)があり、今日に至るまで園芸に纏わる様々な業務を執り行っている。ランに関しては、例えば新たに交配された新種などの認定や、国際的なランコンテストの審査も行うなど、その影響力は大変大きい。
24. 前掲書『ウィリアム・モリスの庭』には、Morris が実際に植栽していた植物が写真入で紹介されていて、大変有益である。無論その中に、熱帯産のラン科植物は見出せない。概してイギリスは日本より緯度が高く夏季の気候は比較的冷涼であるため、*Primula*(サクラソウ属)やゆり科 *Fritillaria*(バイモ属)なども Morris の庭では栽培されていたようである。わが国の平野部(特に関西)では、これらの植物は夏季大変暑がり栽培しづらい。ついでながら、南アメリカアンデス山脈の標高2,000~3,000mの雲霧林地帯が原産地である、ラン科の *Masdevallia* 属や *Preurothallis* 属、あるいは大輪花を着ける *Odontoglossum* 属は、イギリスの冷涼な夏の気候に適し、大変人気がある。ちなみに、*Odontoglossum crispum* は、十九世紀末のイギリスをはじめヨーロッパ各国で一大センセーションを巻き起こし、現地から200万株以上がヨーロッパへ持ち込まれた。これらのランは、わが国では特別に冷房室に入れ夏季の温度管理をしない限り、栽培は難しい。
25. 宮前保子 著 『イングリッシュ・ガーデンの源流—ミス・ジーキルの花の庭』(京都: 学芸出版社、2001)、p.183~6。他に、Anne Helmreich, *The English Garden & National Identity —The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002)も示唆的である。
26. 同時に一般人も、植物の知識を深めるべきであると思う。自然保護運動は、現在自然破壊が続いている地域に対し、反自然破壊キャンペーンなどの示威運動がしきりに行われ、最終的に成果があり破壊は止められる。しかし、この時点から本来の自然回復活動が始められるべきだ。そのためには、運動に携わる人たち全てが、自然に対する豊かな知識を持たなければならない。だが、実際には人々の植物などに関する知識は予想外に乏しい場合が少なくない。示威運動が功を奏しそれ以上自然が破壊されることがなくなっても、果たしてその場所を本来の自然状態に戻せるのかどうか、疑問視する向きも多い。あるがままの自然状態で放置するだけでは、自然保護は不完全だといえる。例えば、屋久島の杉の巨木は樹齢数千年を経ているものが少なくない。これは、太古の昔から屋久島を全くの手付かずの状態に放置したためではない。この島ではかなり以前から、樹林の間伐が行われてきた。そのお陰で、乏しい養分が適度に分配され、また木々の生長を妨げる邪魔な木々も伐採されたのである。自然保護のためには、適度に木々を「間引く」必要がある。尤も、ガーデニングを始め植物に関する人々の関心は、最近特に高まりつつあり、園芸店のみならず公的機関主催のガーデニング教室は各地で随時開催されている。じかに植物と触れ合うことで、人々に植物の生態を認識させ、結果的に益々人々の自然保護意識を啓発していくのが本来の目的であるようだが、このような教室の参加者は大変熱心である。イギリスにはガーデンヴィジットという習慣があり、一年のある時期にガーデニング系の雑誌などにノミネートされているガーデンを、希望者が訪問しその所有者から栽培に関するさまざまなアドバイスを得るものである。ここでは、植物の種類、肥料、灌水、日照など、園芸に関する様々な質問が飛び交い、ガーデンは活気付く。単なる物見遊山的な訪問ではない。